

2012年1月4日
代表取締役社長執行役員
小出 三郎

年 頭 挨拶

新年おめでとうございます。今年も皆さんにはお世話になります。ぜひよろしくお願いたします。

海運、そして私たちの会社を取り巻く環境に関しましては、一昨年・昨年と、豪州の洪水、東日本大震災、円高、更には燃料高だということで、様々なことが詰め込まれすぎているほど詰め込まれていて、実に色々なことがありすぎ、ひとつひとつ取り上げて講釈するのも詮無いことですからやめます。これらは全て過ぎたこと、過去のことですので、過去のことは忘れた方がよろしいのではという気持ちがあります。

一方、私どもの海運業界自体ですが、昨年あたりから今年もちょっと続くと思いますが、皆さん挨拶代わりに「悪い」「暗い」「しんどい」の大合唱が起きていたという感じがします。ただ、ここへきて少し雰囲気も変わってきたと思える点は、私たちの会社の業績とかマーケットに非常に大きな影響がある中国の新造船の問題ですが、これがひょっとしたら造船所の数も思ったより多くないのではないかと、それから出てくる船も意外と少ないのではないかとという点であります。即ち、我々と利益相反する相手方の人たちから船が山ほど出るぞ出るぞというような脅迫まがいなことを言われ続けてきたのですが、私はこの点については不必要に恐れおののくことはないのではないかと気がしております。

それからもう一つ、変化の兆しは、日々マーケットで戦う管理職・担当者の方々のメンタリティーといったらいいのでしょうか、私のみたところでは非常にタフになってきたなという感じがします。人間というのは弱虫を背中に背負って生きている。私も背負っていますが、弱音の虫を退ける勇気というか、強靱なスピリットを皆さん多少意識して持っていないではありませんか。

それから、世界を見渡しますと、ヨーロッパ、ギリシャの通貨危機だ、ユーロ安だということですけど、これがいつまでも続くものでもないでしょう。それからアメリカに目を移せば、失業だ、雇用問題だということがありますが、これも大統領選挙があるということもありますが、これまたいつまでも続くことないでしょう。更に我が日本ですが、これは確実に震災からの復興の年になります。また、大事な隣の中国ですけど、ちょっと景気がいきすぎたので冷まそうかなということで、昨年の中ごろあたりから減速といいますが、景気過熱を冷やすという雰囲気でもございましたが、ここに来まして景気過熱抑制修正、解除に向かうかなという雰囲気が出てきました。現実に正月、年明けになってから中国のインフラ工事、土木事業を再開の報道も聞こえてきています。

これらのことから、上がった下がったの日々のマーケットは少々横において、多少中長期のスパンで今年を見ますと、今年は底を打って浮揚する年、そして来年は浮揚から高揚する年という捉え方、あるいはシナリオを描いていいのではないかなと見ております。多少戦闘的な言葉で言い換えますと今年から来年にかけて海運界はリベンジの年と捉えたらと思っております。

ケーブサイズバルカーで言いますと、リーマンショックの後の時点で10万ドルのマーケットなど二度と来ない、2006年、2007年のような時代など二度と来ない、という意見が圧倒的多数でした。確かに、来ないかもしれませんが来るかもしれません。勝手に決めるなと言いたい。勝手に諦めるなと言いたい。諦めた方が負け、相手は諦めるのを待っています。「一人で見る夢ただの夢、皆で見る夢現実に」、という言葉もあります。多少大風呂敷を広げて夢を見ますと、皆が仮に10万ドルだと言ったら本当にそうなるのです。市場とはそういうものです。鉄鉱石は200ドルだと皆が思ったらそういうダイレクションに向かいます。それが市場のメカニズムです。

話は変わりますが、私たち役職員は、当社は今年ますます資源エネルギー輸送、ドライバルク物流というものに集中していきたいと考えております。これは中長期的にみてこの資源エネルギー・ドライバルク物流というものが将来性のある成長産業だという見込み、或いはそれ以上の確信に近いものを持っているからであります。日々のマーケットでは滑った転んだがあるかと思いますが遠目から世界の動きを見ていただくと、この見方は決して間違っていないと思っております。ぜひ皆さんにも私たちと同じような考え、見方をシェアしていただけたら非常にうれしいと思っております。当社を含めまして海運界は、昨年11月、12月頃から急激に業績が悪化し苦労しております。私たちは、資源エネルギーあるいはドライバルク物流というものに賭ける気概、意欲、あるいは覚悟というものがある、なおかつその業界・分野でプロフェッショナリズムを各々が私を含めて発揮していけばちょっとやそとの不況、暴落に踏みにじられることはないと思っております。

三ヶ月前の創立記念日に皆さんにもお話しして、依然としてあのとき申し上げた気持ちと全く変わっておりませんが、その中で三点ほど申し上げたことがあります。第一点は、マーケットの中でぜひタフに戦ってほしいという点。それから二点目、個人技を磨いてプロフェッショナリズムというものをいつも頭に描いて仕事をやっていただけたらいいのではないかなと。それから三番目は、仕事というのはひとつの作品を造るのに似ている、ぜひ後世に残る良い作品を残していただけたらという点です。

それで、二点目の個人技だ、プロフェッショナリズムだという点なのですが、会社は集団競技・団体競技としてきちんとした規律の中で仕事をするものだという見方もあるかもしれませんが、勿論、それぞれの個人技の上に集団プレーが成り立っているのではあります。私と致しましては少し集団とは離れて己の力で集団を突破してひとりやり抜くという人があらわれても、これはこれで企業の活力としては面白いのではないかなと思っております。サッカーで言うなら、パスをしなくて一人でドリブル突破する、という方がいても

別に構いません。

最後になりますが、冒頭申し上げたように、大変な年、たぶん歴史的な乱世が訪れているのだと思います。そして単なる激動ではなく超激動の時期を迎えているのだと思います。20年後、30年後に今を振り返って、2011年、2012年は本当にすごい時代だったねというように語られることになるかと思います。3月11日の直後の春の高校野球の選手宣誓での「生かされている命に感謝」という言葉が思い出されますが、この超激動の時代と歴史的な乱世に働かされている、生かされている私たちの運命、宿命、あるいは幸運に感謝を捧げ私の年頭の挨拶としたいと思います。今年もよろしく願いいたします。どうもありがとうございました。